

「見直したい季節の行事（まとめ）と実体験の素晴らしさ」

講師 すとうあさえ

2021年11月24日（水）



季節は晩秋。

子どもたちが帰った後の砂場には桜の葉っぱが一行に並んでいました。

小さな足跡も残っています。寒くても裸足がいい。冷たくても水がいい。

そんな声が聞こえてきそうです。

皆さまの園では、どんな晩秋の景色を見ることができるのでしょうか。

今まで、季節の行事の由来やエピソードをお話ししてきました。今回は、「直接体験・五感を揺さぶる体験」という視点から、主な季節の行事をおさらいしていきたいと思います。

■季節の行事について押さえておきたいポイント

① 季節の行事は「祈りと感謝」

豊作・健康への祈り

豊作・健康への感謝

② 身近にある草や花や木や葉っぱなど、自然の生態を行事に取り入れて、厄払

いをし、豊作を願い、健康でいられますようにと願ってきました。

その土地、その時季に収穫できる食材で行事食をこしらえて皆で食べてハレの日を祝いました。

③ 季節の行事は、長い時間を経て、人々が暮らしの中で得た直接体験によって

育まれてきたものなのです。

■今の子どもたちの暮らし

子どもたちも私たちも、デジタル化、IT化された暮らしの中にいます。小学校ではタブレットが配布され授業で使われています。

デジタル化、IT化された暮らしの中で、子どもたちは「間接体験」「擬似体験」が多くなり、「直接体験」をする機会が少なくなっていくと言われています。

体験活動とは、文字どおり、自分の身体を通して実際に経験する活動のことであり、子どもたちがいわば身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく活動のことである。この中には、対象となる実物に実際に関わっていく「直接体験」のほか、インターネットやテレビ等を介して感覚的に学びとる「間接体験」、シミュレーションや模型等を通じて模擬的に学ぶ「擬似体験」があると考えられる。しかし「間接体験」や「擬似体験」の機会が圧倒的に多くなった今、子どもたちの

成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている。今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」である。（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」平成8年7月19日中央教育審議会答申より）

■子どもたちに必要なこと

五感を通じた体験の重要性（一部抜粋）

脳の発達を促す経験(学習)は何かというと、多感覚の同時入力を経験値を上昇させると考えられ、五感を介して様々な情報を得ている。

「初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
第1回会議主な意見等の整理」

（令和3年8月10日文部科学省中央教育審議会より）

改めて、幼児期にたっぷり直接体験をすることが大切です。そこで、今回は季節の行事の活動も、「五感を揺さぶる直接体験」の視点から見ていきましょう。

お正月



●もし獅子舞がきたら・・・

私の園では「獅子舞」にきてもらいます。

笛と太鼓の音。獅子舞の口が合わさる時の音。頭をかじってもらう時の緊張感。

悪いものを追い払ってくれるという目に見えない力。神聖な空気。

●もし、どんど焼きを目の前で見たら・・・ (1月15日)

旧暦では15日は満月の日。夜、満月の空に燃え上がる大きな火。

熱さ、匂い、音。けむりで目が痛い。火の粉。

*獅子舞がきたら、どんど焼きをみたら、子どもたちはどんな印象を持つでしょう。

想像してみよう！

節分



●豆まき：豆には、鬼を追い払う力があると言われてている。

炒った大豆ではなく、新聞紙の玉を鬼に投げる場合も、大豆の力を伝える工夫をしよう。

●やいかがしを作ってみよう。ヒイラギのトゲ、触ってみよう。

イワシを焼いてみよう。におい。食べてみよう。

トゲは痛い～。ヒイラギが嫌いという鬼の気持ちがわかるかも。

*ヒイラギのトゲを触ってみたら、イワシを焼いて食べてみたら、どんな印象？

ひなまつり



●雛人形：7段飾りのお雛様を飾る家が少ない。ぜひ園で飾って、人形を見ながら語り合って欲しい。7段飾りは婚礼の様子を表しているという。それぞれの人形のお顔や持ち物、お役目などを想像してみる。

●お雛様を作ろう：石や草や花などをお雛、め雛に見立てて二つ並べるだけでお雛様の出来上がり。園庭のあちらこちらにお雛様がお目見え。

*自然のものをお雛様に見立ててみよう！どんなお雛様を作りますか。

端午の節句



- 菖蒲が主役：においの強い菖蒲で厄を祓う。においを嗅いでみよう。ちぎって嗅いでみよう。菖蒲湯に入ろう。

- よもぎも主役：においを嗅いでみよう。ちぎって水を入れてすりすりしてみよう。においがぷーん。何色の水ができるかな。色とにおいが子どもたちの想像力を膨らませる。

*菖蒲とよもぎのにおい、嗅いでみよう！

七夕



- 笹の葉の音を聞く。その音を聞いて神様がいらしてくれと言われてる。

●里芋の葉の朝露は、天の川のしずく。集めてすみを摺って、願い事を描いて

みよう。すみのにおいや色合い。

*笹の葉の音の揺れる音、聞いてみよう。墨のにおい、どんなにおい？

お月見



● 夜、家族で月を一緒に見る。虫の声が聞こえる。暗い。手を繋ぐ。その温

もりを感じよう。

*月を見上げよう。虫の声に耳を澄ませよう！

冬至



- ゆず：香り。ゆず湯の温かさ。お風呂での語らい。
- 運盛り：「ん」のつく野菜を集めてお盆に守るとそこに幸運が集まってくる。

いろんな野菜を触ろう。においをかぐ。食べる。

*ゆずの香り、どんなにおい？ どんな「ん」を集める？

.....

.....

.....

そして、またお正月がやってくる。

■ 「行事食」について。

和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。

正式名称「和食：日本人の伝統的な食文化―正月を例として―」

和食の特色の1つとして、「正月などの年中行事との密接な関わり」が挙げられている。



日本の食文化は、年中行事と密接に関わって育まれてきました。自然の恵みである

「食」を分け合い、食の時間を共にすることで、家族や地域の絆を深めてきました。

(農林水産省)

正月には人が集まり、「おせち」や「お雑煮」を食べるように、人々はハレの日に集まって特別の料理（行事食）を食べてきました。

和食は、みんなで食べる〈共食〉が基本。

園でも行事食を作り、みんなで楽しく食べる、という体験を大事にしていきましょう。

■行事食は、その土地で取れる食材で作られた郷土食でもあります。

郷土食や、地元の食材を行事の時に取り入れて、料理をして食べる体験は、地域への愛着を深くし、人々とのコミュニケーションを豊かにします。

自然と、地域と、子どもたちとともに、季節の行事を楽しんでいきましょう。



晩秋から初冬へ

●和歌山の行事食（例）

https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/index.html

農林水産省「うちの郷土料理一次世代に伝えたい大切な味」より



①



②



③



④



⑤

① 「なれずし」秋祭りのごちそう

夜宮から祭り、その翌日まで、毎日の食事に家族一人に1本ずつ出される。客人には、よく漬かって甘みの出た「なれずし」に、しょうがと甘酒をそえてもてなす。今では少なくなったが、本格的につくる家庭では、1ヵ月前からサバの塩漬けがはじまる。盆が終わる頃に大きなトロ箱で何十匹もの魚が届けられ、たくさんつくって重箱に入れてあちこちの親類に配る。

② 「かきまでご飯」お祝い、雛の節句のごちそう

日高地方では、昔からお祝い事や法事、ひな節句、お祭りなど人が集まる行事で「かきまでご飯」が振る舞われてきた。これは、焼き魚の骨で出汁をとり、季節の野菜を炊いて味付けし、酒を入れて炊いたごはんを混ぜ合わせるもので、酢は使わない。「かきませ」がなまって、「かきまでご飯」と呼ぶ。かつて、日高地方ではサバがよくとれたことから、ごはんを混ぜるようになったのではないかとされている。ちらし寿司とは異なり、温暖な気候を生かして栽培する農作物や紀伊水道で漁獲される新鮮なサバを使った、やさしい味わいのませごはんである。

③ 「いのこもち」秋の収穫に感謝してふるまう

旧暦の10月の最初の亥の日になると実りの秋に感謝し、神仏に供えて「一番亥の子」として祝い、親戚を招いて「いのこ餅」を振る舞う。そのため、秋の収穫が済む頃に、この日のために餅をついて「いのこ餅」づくりに備える。

④ 「わさびずし」 田植えやお盆、秋祭り、お彼岸などのごちそう

有田地方では、昔から田植えや、お盆、秋祭りなど、季節の行事として欠かせないずしとして「なれずし」や、「早ずし」などがつくられてきた。清水地域では、ばしょうの葉を巻いた「早ずし」がつけられているが、わさびが多く自生していたため、わさびの葉を使った「押しずし」も各家庭で作られており、今では貴重なわさびの葉が手に入るときは、冷凍しておいて活用している。

⑤ 「かきまぶり」 祝い事やお彼岸のごちそう

祝い事やお彼岸など、来客が多い時につくる。客が何人来るか分からない人寄せの食事のときは、かきまぶりと汁物をたくさんつくって用意しておく。具材全てを一緒にの煮汁で炊き上げるため、大量につくりやすい。昔は鮮魚を使わず乾物や野菜だけでつくられていたが、最近ではエビなどの具材を加えて家庭で伝承されている。四季の野菜などをずし飯に混ぜてちらしずしにした「かきまぶり」である。家庭でのお祝いごとなど、人が集まるときにたくさんつくって振る舞うほか、昔は田植え休みのごちそうだった。

(参考資料)



「子どもと楽しむ行事とあそびのえほん」
(すとうあさえ/さいとうしのぶ/のら書店)

すとうあさえ (童話作家/学校法人駒場けやき学園理事長)

作品に「子どもと楽しむ行事とあそびのえほん」で第55回産経児童出版文化賞ニッポン放送賞、「はしれ ディーゼルきかんしゃデーデ」(童心社)で第7回住田物流奨励賞特別賞、「はじめての行事えほん」シリーズ(ほるぷ出版)で第45回日本児童文芸家協会賞特別賞「ぎぼんじいさんのかきのき」(岩崎書店)「おいしい行事の絵本」シリーズ(ほるぷ出版)「ゴチソウドロどこにいる?」(くもん出版)「れいちゃんのきせつのせいかつえほん」(のら書店)など。